

Ⅱ-13 重量から考える 湯舟坂2号墳出土須恵器の生産

溝口 泰久

1. はじめに

湯舟坂2号墳の発掘は、光り輝く装飾付大刀の出土により一躍脚光を浴びた。優れた出土品はそれだけではなく、200点以上におよぶ須恵器の大量出土も注目すべき成果である。これらの須恵器群の価値はその数量だけではない。湯舟坂2号墳は石室の天井が早くに崩落してしまったことで、発掘調査により日の目を見るまで副葬品は良好な状態で保存され、ほとんどの須恵器が完全な形で残っていた。横穴式石室から須恵器が出土すること自体は一般的であるが、湯舟坂2号墳出土須恵器ほどの質と量を兼ね備えた事例は全国的にみても非常に貴重である。完形の須恵器が多いことに着目し、今回の悉皆的再調査では出土須恵器全点を重量計測した（本書Ⅱ-14参照）。本稿では「重量」という属性から湯舟坂2号墳出土須恵器について考えてみたい。

2. 湯舟坂2号墳出土須恵器の概要

本題に話を進める前に、分析の前提として湯舟坂2号墳出土須恵器の概略について述べておこう。湯舟坂2号墳で出土した須恵器には、飲食に使用する基本的な供膳具である杯をはじめ、装飾性の高い高杯、貯蔵具である壺など、様々な種類の器がある。なかでも大半を占めるのは蓋と身を組み合わせる蓋杯で、今回はこの蓋杯と、同じように蓋と身を組み合わせる蓋付椀を分析の対象とする。

石室内における須恵器の出土位置は、奥壁側と羨道側に大きく分かれている。須恵器は形状に製作時期の差が反映されやすく、奥壁側に集中する須恵器が羨道側に分布する須恵器よりも古い特徴をもつ。蓋杯については、奥壁側では蓋と身がほぼ同形である古墳時代以来の蓋杯、いわゆる杯Hしかないが、羨道側では飛鳥時代に出現する蓋につまみのついた新式の蓋杯、いわゆる杯Gも含まれている。奥壁側で出土した須恵器は若干の時期幅があるものの、畿内の須恵器の時期決定に参照される陶邑編年においてTK43型式期に相当し、おおよそ6世紀後半でも新しい時期に位置づけられる（田辺1981）。また、羨道側で出土した須恵器は基本的に奥壁側のものより新相を示すが、最も新しい段階に位置づけられる杯Gは飛鳥地域の土器編年における飛鳥Ⅱの様相に似ており、おおよそ7世紀半ば頃に位置づけられよう（西1986、深澤2002）。

湯舟坂2号墳出土須恵器は、使用された粘土の色調や含有する砂礫の特徴から計14類の胎土グループに分類されている（表1）（奥村編1983）。胎土の違いは粘土を採集する生産地および製作者集団の違いに起因すると考えられ、同じ胎土グループに括られる須恵器は同じ製作者集団によって作られた可能性が高い。胎土グループごとに石室内の分布傾向が分かれば、1～7

表1 各胎土グループの器種組成 (奥村編 1983 を基に作成)

器種 胎土	杯H		杯G		椀		把手 付椀	高杯			甗	横 瓶	平 瓶	長頸壺		短頸壺		短頸 小壺	子 持壺	壺 蓋
	身	蓋	身	蓋	身	蓋		有蓋		無蓋				有 脚	無 脚	有 脚	無 脚			
								身	蓋											
1類	1	1						15	15			1						3		
2類	5																			
3類	10	9												1						
4類	5	3																	1	
5類	2	4																		
6類	1	2																		
7類					11	5									1					
8類	6	5																		
9類		2					1	2	1									1		
10類	1	6						3	1		1					1				
11類	12	12																		
12類	3	3	11	3																
13類														1						
14類			2																	
その他	3	5	6							7	6	1				2	1			2
計	49	52	19	3	11	5	1	20	17	7	7	1	1	2	2	1	2	5	1	2



写真1 蓋杯を引き剥がした割れ口

たままの蓋杯セットの存在である⁽¹⁾(写真1)。しかも、割れ口は鋭いままで摩滅していない。鋭いエッジの部分は日常的に使用していれば少しずつ摩滅し丸みを帯びていくはずだ。よって、湯舟坂2号墳出土須恵器には埋葬行為に伴う必要性から入手されたものがあるということになる。生産地から直送されている蓋杯は成形段階の蓋と身のセットを保有している可能性が高く⁽²⁾、古墳という最終消費地で出土した須恵器ながらも生産のありかたについても考えることができる。

3. 出土須恵器の重量

欠損部を石膏で補填している個体も含めると、発掘調査報告書に図示されている湯舟坂2号墳石室内から出土した須恵器計208点の総重量は71.94kgを測る。刀剣や馬具などの金属製品の総重量は約9kgだったため、出土品に占める須恵器の圧倒的な存在感がよくわかる。個々の須恵器の重量は材料として使用された「粘土の重量」とおおむね一致すると考えれば、高杯などの複数のパーツからなる須恵器と比べて成形工程のシンプルな蓋杯と椀は、重量値の個体差が小さいと予測され、重量値を粘土素材に関わる有意な属性とみなせるかもしれない。

図2は、奥壁側と羨道側で出土した須恵器の代表的な胎土グループから、蓋杯および蓋付椀の蓋と身の重量から作成した箱ひげ図である。図2から読み取れることは大きく3つある。

①杯Hは各胎土グループ（3・4・8・11類）に共通して蓋と身の重量値が収斂する傾向にある。生産時期および製作集団に関わらず共通する傾向といえる。

②羨道側で出土した杯G（12類）も、杯Hと同じように蓋と身の重量値が一致する。

③奥壁側で出土した蓋付椀（7類）は蓋と身の重量値が大きく乖離する。

以上のような点を指摘することができるが、なぜ蓋と身の重量値の間にこのような傾向が認められるのだろうか。それぞれの器種の性格を踏まえて考察したい。

4. 考察

まず、杯Hの蓋と身の重量値が一定の値に収斂するのはなぜだろうか。筆者は粘土素材の用意に理由があると考えている。杯Hは蓋と身がほとんど同じ形をしており、効率的に同じ大きさの蓋と身を作り出すためにあらかじめ同量の粘土を用意してから器の成形に進むという工程を踏んでいたことに起因すると考えてはどうだろうか。複数の胎土グループ、すなわち複

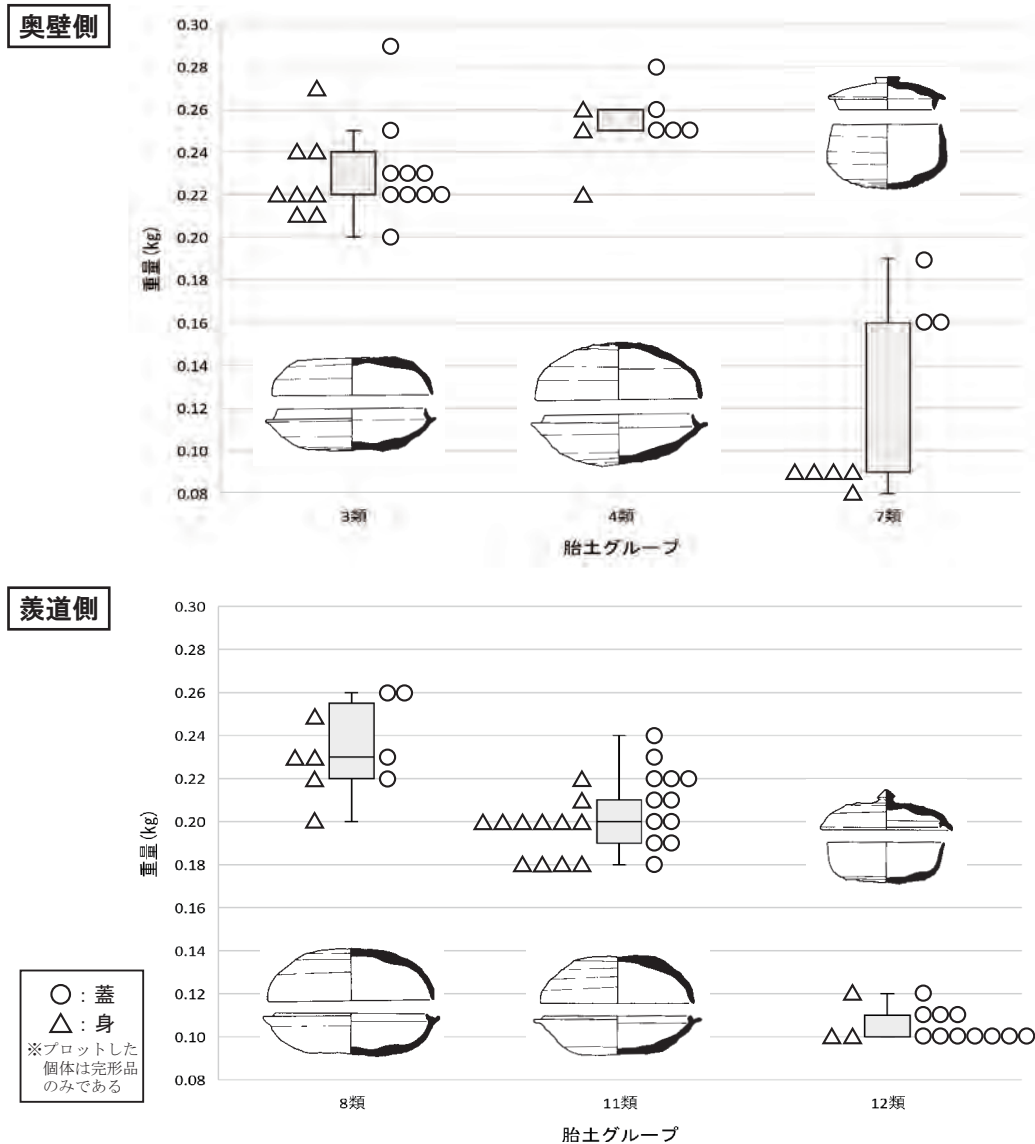


図1 蓋杯と蓋付椀の重量分布（須恵器：S=1/6）

数産地を横断して認められる重量傾向のため、ある程度の普遍性は指摘できそうである。

続いて、蓋付椀（7類）と杯G（12類）に注目してみよう。これらは金属器の鉢に影響を受けて新たに登場した器種で、蓋は頂部につまみがあり口縁部に「かえり」をもつ。金属器の鉢などは仏具として使用されるなど土器にはない特別な性格をもっており、それを忠実に模倣した須恵器の椀なども特別な性格を引き継いでいると考えられる。

一般的に蓋の「かえり」が大きいものほど古いと考えられ、湯舟坂2号墳から出土した蓋付椀と杯Gについては「かえり」の大きい前者が後者より古い様相を備えているといえる。この2種の器は、金属器指向という点で共通するが、身と蓋の重量的関係は異なる。蓋付椀は蓋と身の重量値が乖離するが、杯Gは蓋と身の重量が一致するのである。蓋と身の重量的一致は杯Hと共通し、先に想定したように蓋と身の重量の一致は粘土素材の用意方法に起因するとすれば、杯Hと杯Gは形が違えど成形工程に共通性があるといえる。金属器に影響を受けて新たに創出された須恵器の蓋付椀と杯Gの間には半世紀ほどの時期差が見込まれ、金属器に由来する新たな器も次第に杯H以来の伝統的な蓋杯生産のなかに受容されていったように見える。蓋付椀と杯Gは同様に金属器指向でありながら後者が供膳具として全国的な広がりをもつという展開の素地として、生産の場における伝統性が示唆される。

5. おわりに

40年前に刊行された発掘調査報告書の時点では注目されていなかった須恵器1点1点の重量に着目し分析を試みたところ、蓋と身の有機的な関係性について指摘することができた。考察については、分析対象が湯舟坂2号墳出土須恵器のみに限られ、憶測が大部分を占めている。どこまで一般化しうるのかは今後に残された大きな課題である。ただ、消費地から須恵器の生産に迫る新たな視点を提示できたのではないだろうか。重要文化財となって久しい湯舟坂2号墳出土品の学術的価値はまだまだ計り知れない。

註

- (1) 蓋の口縁部が融着した身があることは発掘調査報告書に明記されていなかったが、土器観察表に示されている身と蓋のセットはこのような口縁部の状況を考慮した組み合わせであったことから、出土品整理段階でこのような融着品があることは認識されていたことは明らかである。
- (2) 焼成時のセットが保たれていることを写真1が証明する。また、古墳時代の蓋杯は成形段階のセットを組み合わせて焼成したと考えられるため（山本2008）、焼成段階だけでなく成形段階のセットが保たれている可能性が高いといえる。

参考文献

- 奥村清一郎（編）1983『湯舟坂2号墳』久美浜町教育委員会
田辺昭三 1981『須恵器大成』角川書店
西弘海 1986『土器様式の成立とその背景』真陽社
深澤芳樹 2002「山田寺下層の土器について」『山田寺発掘調査報告』奈良文化財研究所
山本雅和 2008「古墳時代の須恵器生産組織について」『吾々の考古学』和田晴吾先生還暦記念論集刊行会

編集後記

2020年に始まる「湯舟坂プロジェクト」は早くも6年目に突入している。教員生活のほとんどを久美浜に捧げてきたといえば大げさだが、府大に着任したのが2018年なので、私だけでなくたくさんの教え子がそれまで縁もゆかりもなかった久美浜に足繁く通ったことは確かである。3回分の成果報告会資料集をまとめて一書にしようと、気軽な気持ちで本書の制作を思い至ったが、皆さんお忙しく、思いのほか難産だった。スケジュールに追われる中、献身的に編集作業を手伝ってくれた二人の大学院生には感謝してもしきれない。

なお、湯舟坂プロジェクト立ち上げ時から一緒に仕事をしてきた、菱田哲郎先生が今年度でご退職される。まだ隣の研究室には山積みの荷物があるので実感がわからないが、1994年に開設した府大考古にとって最大の岐路であり、寂しい限りである。様々な仕事を通じて文化遺産の地域資源化の重要性を教えていただいた学恩に感謝するとともに、兵庫県と接する久美浜にこれからも足繁くお越しいただければと思う。(い)

表紙写真

- 上左 双龍環頭大刀調査風景（諫早直人撮影）
上中 第2回 ACTR 成果報告会風景（栗山雅夫撮影）
上右 「つなプロ」風景（諫早直人撮影）
下 湯舟坂2号墳出土双龍環頭大刀（栗山雅夫撮影）
裏表紙写真 湯舟坂2号墳全景（南西から。栗山雅夫撮影）



京都府立大学文化遺産叢書 第33集

地域資源としての湯舟坂2号墳

編集 諫早直人（京都府立大学文学部准教授）
発行 京都府立大学文学部歴史学科
〒606-8522 京都市左京区下鴨半木町1-5
<https://kpu-his.jp/>
発行日 2025年3月6日
印刷 北斗プリント
〒606-8540 京都市左京区下鴨高木町38-2